

に逢ふて始めて會の話を聞いて見ると私は淨瑠璃は下手やが師匠と常貴と彼々云ふ仲やで常貴に壽司屋を語らして私に椎の木の端場を語らしよるね、お前も其つもりで師匠處へ行きや」

「そんなら何かいな、六さん今お前が云ふたん夫れほんまか」

「ほんまも嘘も私が今見て來た處や、嘘か、ほんまか師匠の宅の表から覗いて來たら解るやないか」  
「バ、馬鹿にして依るがな、マア六さん聞いてや、私は今度の會に斯うやつて稼業を休んで走り歩いて居るね、夫れも盗人の午睡や當があるね、そんな事なら是れから稽古屋へ行て見た上で私にもつもりがある。常やん處の姐貴は悋氣深い女やよつてに姐貴を焚き付けて夫婦喧嘩をさしてやる」

「オイ次良貴そんな事を仕いなや」

「だんない、ほつといて、ぢやら／＼した、人を馬鹿にして依る。併し待てよ、師匠かて云ふてたで他の連中さんは兎も角次良はん貴郎程好きなお方はあれへんと、私と師匠とあんまり仲が宜いので六さんが悋氣をして私に惑亂をさしよるねで、師匠に限つて其んな事があるもんか、ア、師匠處の門口へ來たで迂濶内へは這入れんで、能う見届けてから、こをつと、見る處がないかいな、ある／＼格子の隙間から覗いたる、ア、六さんの云ふてた通りや、師匠と常やんと差向ひでイチヤ／＼云ふて一杯飲んで依る、ア、腹が立て來た常やん處の姐貴に焚付けて來たる、こうつと如何したるまでよそうや／＼姐貴は悋氣ときたら目も見へぬ様になりよる、傍へ茶碗や鉢や皿を置いといてや

ろ、投げて割りよつたら家の兄貴の商賣が焼つき屋をしてよる依つてに其所で兄貴に錢利益をさして入れ合せをしたる、姐貴今日は」

「オ、誰方かと思ふたら次良はんやおまへんか、サア何卒お上り、マア此の度は稽古屋の會で貴郎が甚ふお世話をして呉れてはるさうで家の常はんは彼んな不精なんでおます依つてに次良はん貴郎ばかりに骨を折らして常はんはに貴郎も些と馳り廻つてやつたら何うだんねと云ふてまんね」

「イ、エ私は此様な事が好きでやつてまんね、併し姐貴甚い宜い着物を縫ふてなはるな、そら貴女のんだつか」

「イ、エ常はんのン、何時も會度事に同じ着物を着せて置かれしまへんので急に縫ふてまんね」

「それ常やんのんだつか、それ」

「へエ——」

「姐貴、貴郎それ嬉しいと思ふて縫ふてなアるか又憎たらしいと思ふて縫ふてなアるのか」

「そら彼の方が喜ぶと思ふて縫ふてまんね」

「ア、左様か、併し姐貴今も皆連中が寄つて貴女の噂をしましたで」

「マアさよか、何うで妾の棚卸しを皆が寄つて云ふてはつたんだつしやろう」

「何云ふてんね姐貴、皆が貴女の事を云ふて褒めてたで」